

◆連載

いま留萌をかし

●母なる留萌川

「ルルモツペ」言わずと知れた留萌の語源である。アイヌ語で「海水が静かであるもの」という意味だといふ。先住のアイヌの人たちがゆるやかに流れている留萌川をそう呼んでいた。それが、いつしか、留萌川の河口のあたりをルルモツペと呼ぶようになったらしい。その後、この地方を代表する地名となった。

留萌川は天塩山系の南端、空知と留萌との境界から発し、途中で、中幌糠川、チバベリ川などの諸川をあつめて西流し、日本海へ注いでいる。往時は、総延長72キロメートルもあり、その蛇行箇所は四百にものぼったという。現在は河川の改修などにより延長30キロメートル程になった。和人がまだ留萌地方の主役になる前、この留萌はアイヌの人たちの一大中心地であった。現在の元町にコタンがあ

り、和人との交易がさかんであった。それは、この留萌川は流れが遅く、深いことから二、三百石程度の船が停泊できる良い港として利用されたからに他ならない。多くの船が本州や松前などの間を往来していたことだろう。留萌川が港として使われていたことは、明治になって留萌港が開

次に、この川は内陸への交通路としての機能をもっていた。江戸時代の末にこの地を訪れた松浦武四郎は、留萌から留萌川をさかのぼり、途中からチバベリ川を経て、信砂川筋へで、北空知の恵岱別から石狩川筋へであるという道を、アイヌの人たちが利用しているとききしるしている。さかんにこの交通路が利用されるようになるのは、明治二十九年から開始された内陸部の開拓からである。藤山要吉

による団体入植からである。当時、留萌川の両岸は、うっそうとした森林と熊笹が生い茂り道路などはない状態であった。最初の入植者たちは、留萌川を舟でさかのぼり、やっとのおもいで入植地に入つたという。そして、これらの人たちの唯一の交通路として明治四十三年の鉄道開通まで利用されたという。古老の話によると、藤山から留萌まで下りは半日、上りは途中一泊の行程であったという。また、開拓民の内職として、冬の間に薪をつくり、川岸に積んで目を付けておく。それを春の雪融けの時に留萌川へ流した。山で一敷五十銭の薪が留萌へ流すと三円五十銭で売れたという。当時沿岸では鯨漁がさかんであり、粕炊き用の薪が必需品であった。

留萌川は幾多の留萌人の歴史をみつめながら、留萌川自身も変化してきた。留萌川か

ら留萌港が生まれ、留萌川に沿って鉄道がはしった。今度は留萌ダムが留萌川を変えようとしている。留萌の町も人も自然も留萌川によってはく

くまれ変化してきた。これからも留萌川は留萌の母となり子供たちを見守ってゆくことだろう。

大正初期の留萌川



広報るもい ●連載ヨーロッパ視察雑感

昭和62年2月/発行・留萌市編集・総務部秘書企画課印刷・留萌印刷株式会社